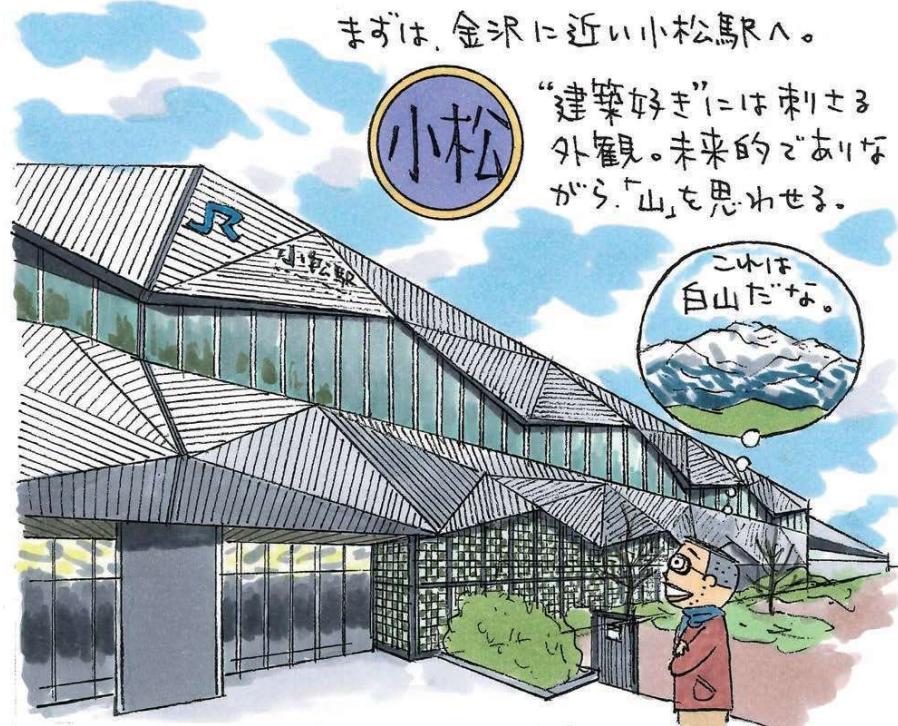


画文家 宮沢 洋が巡る

## 北陸新幹線(金沢・敦賀間)新駅図鑑

文・画・写真：宮沢 洋（画文家）



筆者は「建築」をイラストと文章でリポートする仕事をしている。だから「駅舎」は大好きで、駅だけを見るために遠出することも多い。

だが、振り返ってみると、これまで見てきた駅は、在来線の駅ばかり。新幹線の駅は頭をひねってほとんど思い出せない。「どれも似たりよったり」のイメージなのだ。

今回、「北陸新幹線の新駅をリポートしませんか」とお声掛けがあった。おおっ、これは良いチャンス。勇んで現地へ赴いた。

### 小松駅 コンピュータ時代のパラパラ造形

まずは、現在の北陸新幹線終着駅である金沢に一番近い小松駅へ。この駅には5年ほど前に来たことがあったが、新幹線駅舎が建設された東口に出て驚く。「なんて攻めたデザイン！」

頭の中では「新幹線の駅=ツルッ

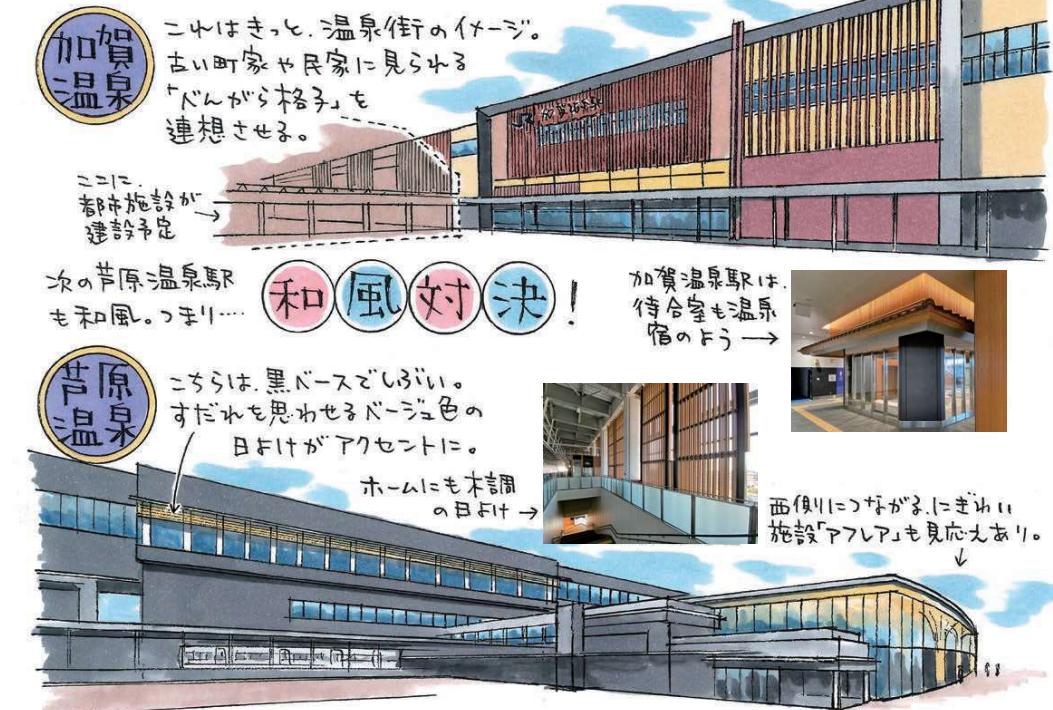
とした箱」というイメージだったのだが、全く違う。全体がガタガタといふか、パラパラというか…。垂直面が三角形で分割され、その三角形が異なる角度で微妙に傾いている。

筆者は建築を見ることが仕事なので、こういう見慣れない形を前にすると、設計のモチーフが何かを想像する。これはきっと、「山」に違いない。石川県であることを考え合わ

せると、「白山」ではないか。

後で資料を見るところ書いてあつた。「小松駅は『ふるさとの伝統を未来へつなぐターミナル』をデザインコンセプトとして、慣れ親しんだ白山の雄大な山並みと未来を感じるターミナルを目指して駅舎の建築工事を進めました」。ピンポン、大正解！

コンピュータで3次元の図面が描けるようになったからこそ実現で



きた形だ。昔ながらの製図台（2次元）の設計では、部材と部材の接合部の形が確定できない。まさに令和の造形。「伝統を未来へつなぐ」にふさわしい。

施工（工事）の面から言うと、こういう微妙に傾いた面、しかもそれが不規則に連続する形は、内側の鉄骨支持材をつくるのが難しい。部材はコンピュータでカットできても、溶接するのは人間。何事もなかったかのようにサラリとできているが、施工者たちの苦労をぜひ想像してほしい。

**加賀温泉駅&芦原温泉駅**  
瓦屋根がなくても和をアピール

続いて加賀温泉駅へ。この駅は次

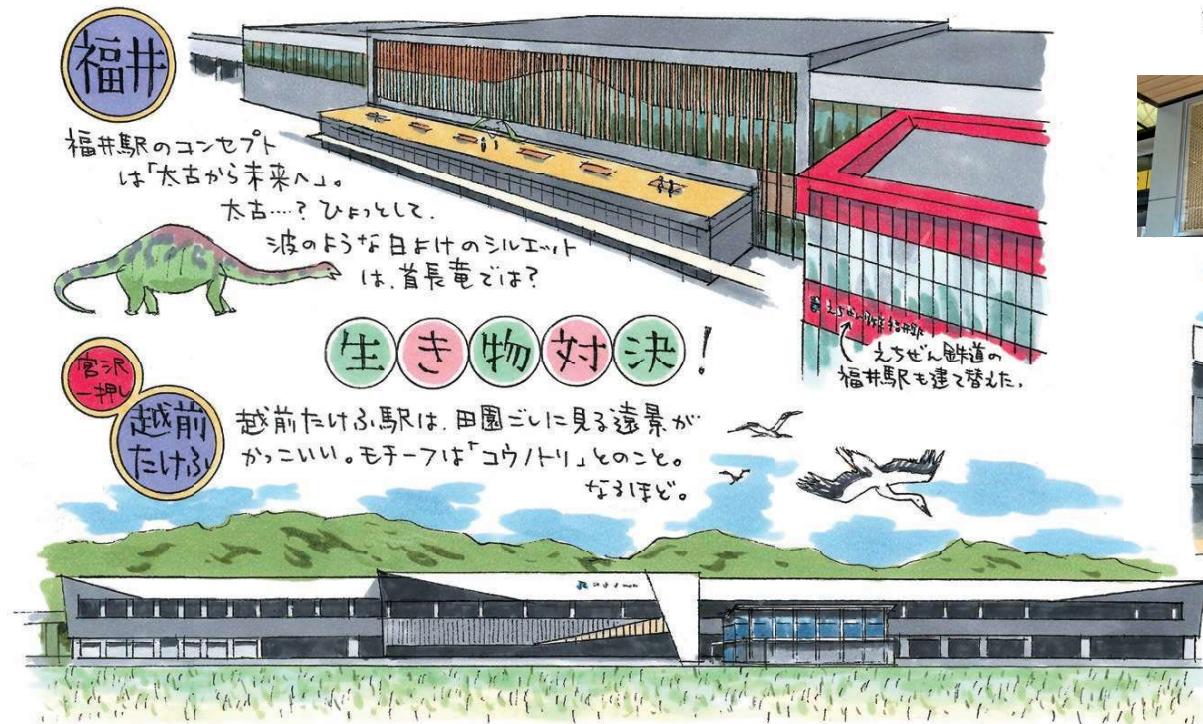
たい。なぜなら、どちらも「現代和風」のデザインだからだ。

和風と言っても、駅舎の上に瓦屋根が載っているわけでもなければ、入り口にお寺のような破風（三角の小さい屋根）が載っているわけでもない。

加賀温泉駅は、正面の中心付近を覆うあずき色の縦格子で「和風だ」とわかる。資料によれば、「加賀市からいただいたデザインコンセプト“加賀の自然と歴史、文化を見せる駅”をもとに、温泉郷の風情と城下町の歴史を感じさせる駅を目指しました」とのこと。あずき色は、古い町家や民家に見られる「べんがら格子」のイメージだろう。

そんなことを想像できるのは建築





関係者だけかもしれない。そこまで詳しくない人のためだろうか。改札内に入ると、コンコースの中央にある待合室が、瓦屋根を載せた「誰にでもわかる和風」だった。

ちなみに、駅の南側には、やはり誰にでも和風とわかる赤瓦屋根の都市施設が建つ予定だ(加賀市の発注、設計は金沢計画研究所・ミナミデ建築設計事務所特定業務共同企業体)。

加賀温泉駅と見比べたい福井県の芦原温泉駅は、ほぼ黒塗りの現代和風。資料には「あわら市からいただいたデザインコンセプト“あわらの大地に湧き出る贊の駅”をもとに、あわら温泉の癒しと旅情が漂う駅を目指しました」とある。

調のデザインが施されており、他はほぼモノトーン。ああこれは、木の色を引き立てるための黒なのだ、と気付く。そしてきっと、削ぎ落とすような空気感が「湧き出る贊」なのだ。

その狙いがわかってから改めて外観を見ると、建物上部の木調の日々の意味が理解できた。あれはきっと、「すぐれ」のイメージだ。

芦原温泉駅は、西口につながって立つにぎわい施設「アフレア」も見

応えがある(2023年3月開業、設計は木下設計)。こちらも「木」と「黒」を重視してデザインされており、駅との一体感が見事だ。

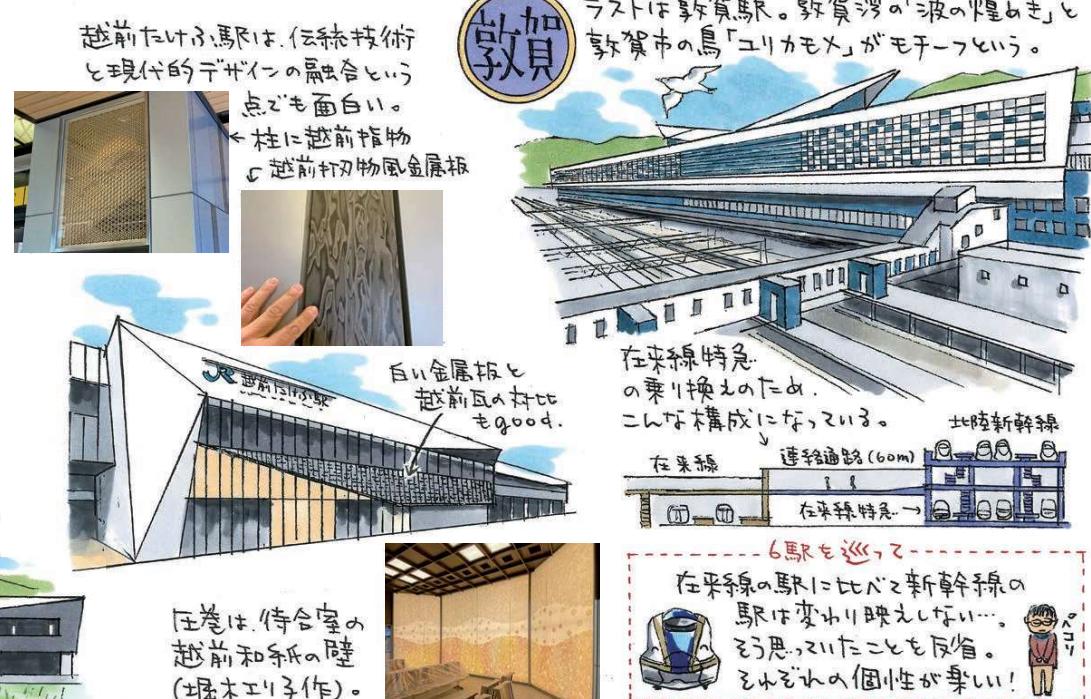
**福井駅&越前たけふ駅  
隠れた恐竜と羽ばたくコウノトリ**

続く「福井駅」は、その先の「越

前たけふ駅」とセットで書きたくなる。

福井駅の外観は、縦格子の長さを変えすることで、なだらかな波のようなシルエットを描いている。あれは何だろう。福井の山か、日本海の波か…。資料を見ると「太古から未来へ~悠久の歴史と自然がみえる駅~」をデザインコンセプトとして、悠久の歴史を未来へつなぐシンボルゲートとなる駅を目指しました」とある。

駅の東口に市が整備した屋上広場があり、そちらは既にオープンしている。広場のあちこちに恐竜のオブジェがある。それらを見ていて思った。波のようなシルエットは、首長竜なのでは…。「太古から未来へ」はそれを遠回しに言っているのかもしれない。そういうことにしたほう



が子どもも楽しめる。

次の越前たけふ駅は、もっとわかりやすい生き物のシルエットだ。資料にはこうある。「越前市からいただいたデザインコンセプト“伝統・文化を未来につなぐシンボルとしての駅”をもとに、コウノトリが飛翔する未来への道標となる駅を目指しました」。そう、白い外観は、羽を広げたコウノトリだ。

筆者が今回見た6駅の中で一押しはこの駅だ。遠景がこんなに目を引く駅舎は珍しい。コウノトリとわかるなくとも、水田の上を羽ばたくような大らかさが伝わってくる。

改札内の各所に施された工芸品のデザインも、じっくり見たくなる。西側に「道の駅 越前たけふ」が隣接しているので、駅を見に行くため

に車で行くのもありかもしれない。

**○敦賀駅  
巨大駅でも地域性をアピール**

ラストは敦賀駅。新幹線と在来線を結ぶ重要な乗換駅であるため、駅舎の高さが約37mと他の駅より高く、構造は上から新幹線ホーム(島式2面4線)、乗り換えコンコース、在来線特急ホーム(島式2面4線)の3層構造になっている。また、乗り換えの利便性に配慮し、エスカレーター26基、エレベーター6基、乗り換え改札機19通路を備えた整備新幹線最大規模の駅だ。

大型の建物なので他駅に比べるとシンプルな箱型だが、それでも壁面が「敦賀湾の波の煌めき」のような模様だったり、屋根の上に「ユリカ

モメ」をモチーフにした小屋根が飛び出していたりと、敦賀しさを的確にアピールしている。

そんなこんなで、6駅を2日間かけて巡った。「どれも似たりよつたり」という取材前のイメージは大間違いだった。反省…。北陸新幹線が延伸したら、皆さんもぜひ駅のデザインを楽しんでほしい。

**宮澤 洋 (みやざわ ひろし)**  
画家、編集者、BUNGA NET代表兼編集長。1967年生まれ。1990年早稲田大学政治経済学部卒業、日経BP社入社。2016年~19年まで日経アーキテクチュア編集長。2020年独立。著書に「隈研吾建築図鑑」、「はじめてのヘリテージ建築」など。最新刊は「画文でわかる 建築超入門 [歴史と創造]」。